

社会科

牧田 健太郎

1 社会科における他者とともに編む子供とは

進んで社会的事象への理解を積み重ねた子供の、友達との関わりの中で社会的事象の意味や関係性を捉え直す姿。

これまでの実践から、子供が積み重ねた知識を活用して選択・判断を求められる社会的事象（学習課題）と出合ったときに生まれることが多かった。このような社会的事象（学習課題）への一人一人の子供の考えは、何に価値を置いて学習を進めてきたか（働かせる社会的な見方・考え方）によって大きく異なる。そのため、このような社会的事象（学習問題）に考えをもった子供は、「友達はどんな考えをもっているのか」「自分の考えを友達はどのように思うのだろうか」と友達との関わりを求め、他者とともに編み始めるのである。考えを伝え合う場では、友達との社会的事象への認識にズレを感じる。そして、社会的事象やズレを感じた友達と関わる中で、自分が納得する考えをつくり上げる。その中で、社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に捉え、社会的事象の意味や関係性を捉え直していく、つまり、社会的事象への理解を深めていくのである。

上記のような子供の姿を、第6学年「長く続いた戦争と人々の暮らし～わたしたちが戦争を繰り返さないためには～」の事例を通して説明する。学習問題の解決に向けて追究を行い、子供たちは具体的知識を獲得していった。その中で、子供は、特攻隊として戦地に赴いた兵士が、「春風に さいた櫻の さくまもあらず 唯君のため 散るをよるこぶ」という辞世の詩を詠んだ事実と出会い、この詩にどのような思いが込められているのか考え始めた。K児は「春風に さいた櫻の さくまもあらず」に着目し、「ここまで育ててくれた家族のために、命をもって尽くしたいという思いが込められている」という考えを発言した。この考えは、既習内容である国家総動員法や当時の教育で戦争が美化されていたこと等の既習内容を根拠として、兵士が戦争で活躍して国や天皇のために死にたいと思っていると考える多くの子供にズレを感じさせ、詩にある「君」が、家族を指しているのか、天皇や国を指しているのかについて話し合っただけでなく、確実にしたいと思うきっかけになるものであった。その後は、それぞれの考えの根拠や考えの背景を確かめながら話し合ったことで、当時の社会が天皇や国のために尽くさなければならない時代だったこと、そのような中でも現在の私達と同じく家族を思っていたこと等、当時の戦時体制下の社会について多角的に捉えながら、兵士が詩にどのような思いが込められたのか、納得解をつくっていった。これが「友達との関わりの中で社会的事象の意味や関係性を捉え直す」姿である。

2 社会科における他者ととともに編む子供を育てるには

① 社会的事象への切実感を高める(個人の内面へのアプローチ)

- ・施設見学やインタビューといった作業的・体験的な活動の場を設けたり、生活経験や既習事項で説明ができない事実や心情に訴える事実と出合う場を設けたりすることで、子供が社会的事象への関心を高めることができるようにする。(社会的事象への関心)
- ・問題解決に向けた確かな知識を獲得することができるように、資料やインターネットを活用できるようにICT機器等を整えたり、追究の視点が共通する友達と情報交換する場を設けたりする。また、学習の方法や過程、内容について自己評価する場を設けたり、教師が子供の追究

活動を共感的に受け止めながら支援したりすることで、子供が、問題解決を通してつくり上げた考えに自信をもつことができるようにする。(社会的事象に対する考えへの自信)

- ・子供が、積み重ねた知識を活用した考えを関わらせることができるように、実際の社会の中にある諸問題を学習課題として提示し、選択・判断を求められるようにする。ここでは、子供が科学的な根拠のない考えをしたり、衝動的な考えをしたりせず、それまでの問題解決を通して獲得した知識を基に、自分らしい考えをもつことが大切となる。そのため、教師は、子供が問題解決を通して獲得した知識を基に考えることができるように、タイミングや社会問題や社会的事象の内容を吟味する。また、歴史に関する学習等でも、当事者意識をもって選択・判断を求められるような学習課題を提示することで、自分事として社会的事象をもつことができるようにする。

② 多様な考えから社会を多角的に捉える(他者との関わりへのアプローチ)

- ・考えの立場や根拠、追究の道筋といった互いの考えの背景を板書やICT機器で見えるようにしたり、子供が考えの背景に見られる立場や価値観を学級全体で十分に探ることができるようにしたりし、考えの背景にある立場や価値を理解、整理する場を設ける。また、誰がどのような根拠や価値をもって考えをつくり上げたかや、どのような考えとどのような状況で出合うことで子供の考えに矛盾が生じるかなど、子供の見取りと想定を重ねた授業を行ったりすることで、それぞれの考えの立場や考えの背景にある価値が明らかになるようにする。
- ・子供は、他者の考えと出合うことで、表情や発言に驚きや葛藤等の心の動きが見られる。それらの反応は一樣ではなく、子供それぞれによっても異なるし、出合うタイミング等によっても異なる。また、子供に心の動きがあっても、その子供自身がその理由を客観視できていないことも考えられる。そのため、子供の心の動きを、子供自身も周囲の子供も捉えることができるように、考えを丁寧に見取ったり、心の動きがあったと見取った際は、その子供に問い返しを行うことで、心の動きがあった理由となる考えと考えの違いを整理して見ることができるようにしたりする。そうすることで、話合いの中で、折り合いを付けなければならない点や妥協することができない点を意識し、社会的事象の意味や関係性を捉え直すことができるようにする。また、振り返りでは、心が動いた友達の考えや、自分の考えがどのように変容したのかを書く場を設けることで、子供がだれのどのような考えと出合って心が動いたのか客観的に認識できるようにし、友達と学ぶ意義や、社会的事象についての理解の深まりを実感できるようにする。